

「宗教と社会」学会

第 17 回学術大会

プログラム・要旨集

*The 17th Annual Meeting of  
the Japanese Association for the Study of Religion  
and Society*

*Program and Abstracts*

*6 - 7th of June, 2009  
SOKA University*

2009 年 6 月 6 日(土)ー7 日(日)  
創価大学

# 「宗教と社会」学会第 17 回学術大会

2009 年 6 月 6 日(土)－7 日(日)

創価大学

## 目次

|                 |    |
|-----------------|----|
| 日程表、会場一覧        | 2  |
| 会場見取り図          | 3  |
| 個人発表            | 4  |
| テーマ・セッション       | 5  |
| 発表要旨（個人発表）      | 6  |
| 発表要旨（テーマ・セッション） | 22 |
| ホテル・託児所のご案内     | 26 |
| 交通アクセス          | 27 |
| キャンパスマップ        | 28 |
| バス路線図・時刻表       | 29 |

### 連絡先

#### 「宗教と社会」学会第 17 回学術大会事務局

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236 創価大学 A 棟 8 階 中野毅研究室

e-mail : [jasrs2009@gmail.com](mailto:jasrs2009@gmail.com)

tel/fax : 042-691-4545

大会ホームページ <http://jasrs.seesaa.net/>

## 日程表・会場一覧

日程：

6月6日（土）

|             |                           |
|-------------|---------------------------|
| 10:30～      | 常任委員会（A棟8階会議室）            |
| 11:30～      | 受付                        |
| 13:00～17:00 | 個人発表（A324、A325、A326、A327） |
| 17:20～18:20 | 総会（A130）                  |
| 19:00～20:30 | 懇親会（本部棟13階レストラン）          |

6月7日（日）

|             |                      |
|-------------|----------------------|
| 9:00～       | 受付                   |
| 9:30～12:30  | テーマ・セッション（A321、A329） |
| 12:30～13:20 | 昼食（A306：弁当配布場所、A307） |
| 12:30～13:20 | 常任委員会（A棟8階会議室）       |
| 12:30～13:20 | 編集委員会（A125）          |
| 14:00～17:00 | テーマ・セッション（A321、A329） |

会場：創価大学 A棟

|             |                            |
|-------------|----------------------------|
| 受付          | A棟1階ロビー（滝山テラス前）            |
| 本部          | A129                       |
| クローク        | A128                       |
| 常任委員会会場     | A棟8階会議室                    |
| 編集委員会会場     | A125                       |
| 個人発表会場      | A324、A325、A326、A327        |
| テーマ・セッション会場 | A321、A329                  |
| 休憩          | A棟1階滝山テラス、3階天空広場、A306、A307 |
| 書籍・抜刷頒布コーナー | A棟3階エレベーターホール              |
| 懇親会会場（6日）   | 本部棟13階レストラン                |
| 昼食会場（7日）    | A306（弁当配布場所）、A307          |

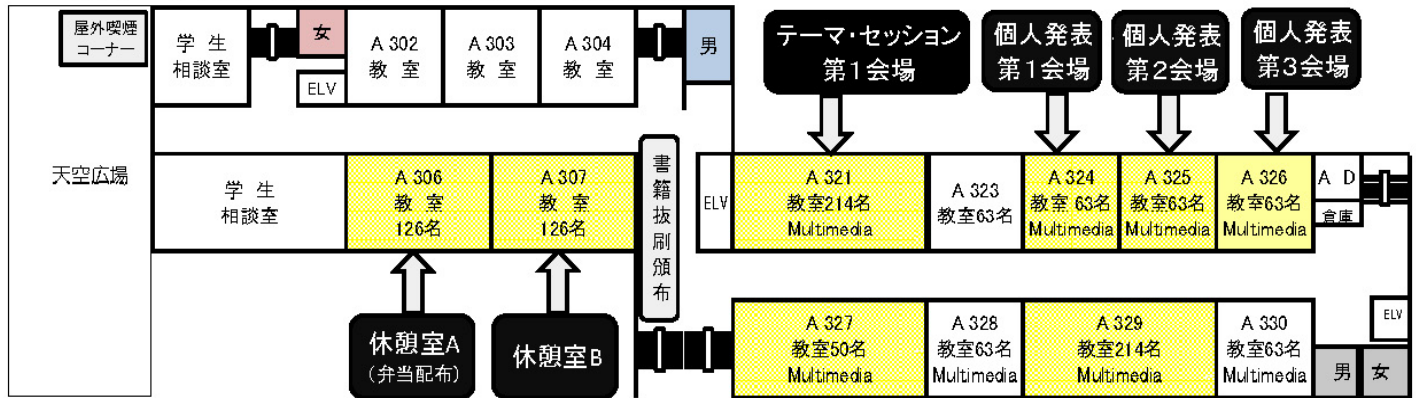
※ 7日昼のお弁当の受け渡し場所は、A棟3階306教室です。なお、飲み物の自動販売機は、A棟1階の滝山テラスにあります（3ページの会場見取り図をご参照ください）。

※ 創価大学の敷地内での喫煙は、A棟1階滝山テラス喫煙コーナー及びA棟3階天空広場にあります。それ以外の場所での喫煙はご遠慮願います。

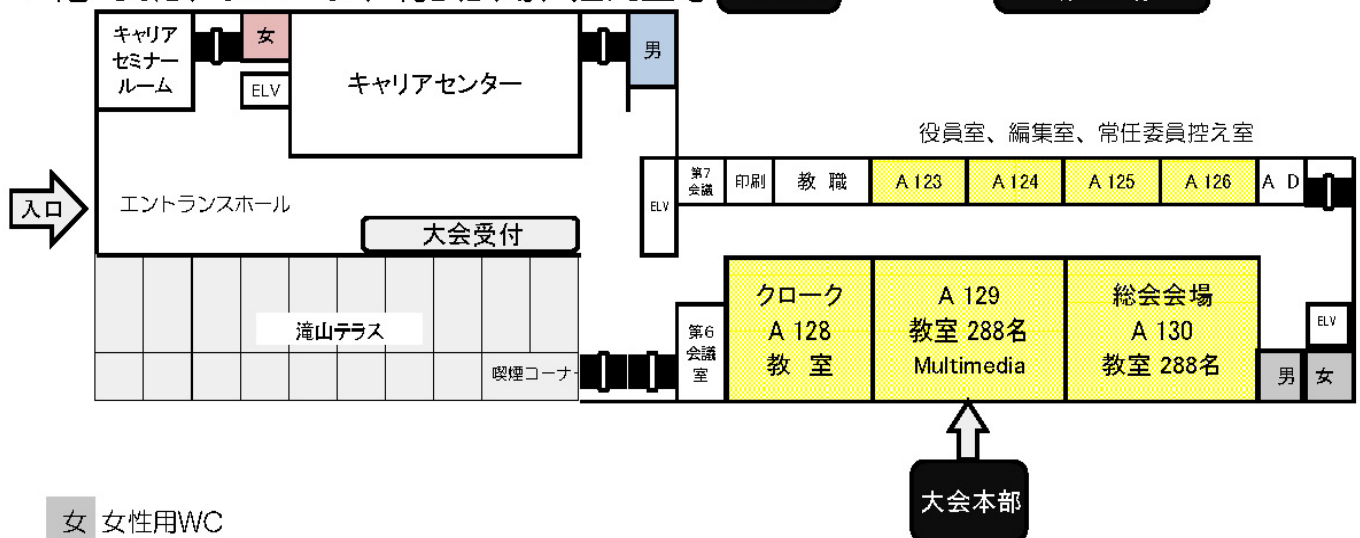
※ 隣接施設として東京富士美術館がごぞいます。開館時間は10:00～17:00（16:30受付終了）となります。詳細は大会ホームページ（<http://jasrs.seesaa.net/>）をご覧ください。

## 会場見取り図

### 3階 個人発表・テーマセッション会場



### 1 階 受付、クローク、総会会場、控え室等



女 女性用WC

男 男性用WC

#### 【注意事項】

○会場はA棟1階と3階の教室です。2階は使用しません。

○会場内は禁煙です。喫煙コーナーは1階滝山テラス内と3階屋外テラスに設けられています。

○1階滝山テラスにはジュース等の自動販売機が設置されています。

## 個人発表（6月6日 土曜日）

|                     | 第一会場（A324）                                               | 第二会場（A325）                                                        |
|---------------------|----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| 13:00<br>～<br>13:50 | 井上大介（創価大学）<br><br>ルチャ・リブレにおける儀礼性と遊戯性<br>—メキシコ民衆文化とカトリック— | 岡本亮輔（筑波大学大学院）<br><br>現代サンティアゴ巡礼における交流と真正性—共同体から共同可能性へ—            |
| 14:00<br>～<br>14:50 | 宮川真一（創価大学）<br><br>現代ロシアにおける<br>グローカリゼーションと宗教             | 今井信治（筑波大学大学院）<br><br>聖地巡礼・ツーリズム・アニメーション<br>—埼玉県鷲宮神社の事例を中心に—       |
| 15:00<br>～<br>15:50 | 藤原潤子（総合地球環境学研究所）<br><br>「異文化」としての伝統宗教<br>—現代ロシアにおける正教復興— | 舟木徹男（龍谷大学）<br><br>オルトヴィン・ヘンスラーのアジール論と<br>アジールの現在                  |
| 16:00<br>～<br>16:50 | 木村敏明（東北大学）<br><br>トバ・バタック移民社会における<br>慣習法的実践の再編とキリスト教     | 山下壮起（同志社大学大学院）<br><br>ルイス・ファラカンの非一貫性—1984年と<br>2008年のアメリカ大統領選挙から— |

|                     | 第三会場（A326）                                                             | 第四会場（A327）                                                                 |
|---------------------|------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| 13:00<br>～<br>13:50 | 一色 哲（甲子園大学）<br><br>戦後政治のなかの沖縄キリスト聯盟<br>—「新沖縄」建設をめぐる地域社会の対<br>立と葛藤—     | 内村琢也（創価大学大学院）<br><br>石原莞爾に於ける宗教と国家<br>—東亜連盟期から戦後の運動を中心に—                   |
| 14:00<br>～<br>14:50 | 栗津賢太（南山大学 南山宗教文化研究所）<br><br>集合的記憶の生成的局面<br>—沖縄における遺骨収集の現代的展開—          | 大西克明（東洋大学 東洋学研究所）<br><br>日蓮系新宗教の歴史的展開と現世への応答<br>—真理の排他的独占と現世肯定の関係を<br>中心に— |
| 15:00<br>～<br>15:50 | 福ヶ迫加那（鹿児島大学大学院）<br><br>墓のメディア性に関する一考察<br>—鹿児島県南薩・奄美の事例から—              | 岡尾将秀（大阪産業大学）<br><br>民衆宗教としての天理教の発生と新宗教へ<br>の展開—幕末維新期における宗教革新—              |
| 16:00<br>～<br>16:50 | 堀江有里（立命館大学）<br><br>キリスト教における「性的志向」概念援用<br>の陥穽—「承認」を求める運動戦略への批<br>判的考察— | 三木 英（大阪国際大学）<br><br>宗教集団の展開モデル                                             |

## テーマ・セッション(6月7日・日曜日)

|             | 第一会場 (A321)    | 第二会場 (A329)      |
|-------------|----------------|------------------|
| 9:30～12:30  | 今日の SGI-USA    | 書評セッション          |
| 14:00～17:00 | 教育資源としての＜宗教文化＞ | 「民衆宗教」研究の新展開 (2) |

### ◆今日の SGI-USA — “World Propagation” から “World Peace” へ—

【第一会場 (A321) 9:30～12:30】

司 会：対馬路人（関西学院大学）

発表者：川端 亮（大阪大学）「アメリカ SGI の歴史と現在—組織と制度から—」

稲場圭信（神戸大学）「アメリカ人信者の回心過程

—ロフランド＝スタークモデルを中心に—」

秋庭 裕（大阪府立大学）「日蓮の 21 世紀—その受容の可能性—」

コメンテーター：中野 毅（創価大学） / 中牧弘允（国立民族学博物館）

### ◆教育資源としての＜宗教文化＞—宗教文化教育はどんな学問領域に関わるか？—

【第一会場 (A321) 14:00～17:00】

企画者・司会：井上順孝（国学院大学）

発表者：野原佳代子（東京工業大学） 「言語学、翻訳理論の立場から」

平藤喜久子（国学院大学） 「神話学の立場から」

牧野淳司（明治大学） 「中世文学の立場から」

山田岳晴（国学院大学） 「建築学の立場から」

コメンテーター：岩井 洋（帝塚山大学）

### ◆書評セッション：カルト／スピリチュアリティ／現代宗教の把握

—藤田庄市著『宗教事件の内側』、櫻井義秀編『カルトとスピリチュアリティ』を題材に—

【第二会場 (A329) 9:30～12:30】

企画者：葛西賢太（宗教情報センター）

司 会：弓山達也（大正大学）

コメンテーター：吉永進一（舞鶴工業高等専門学校）

岩田文昭（大阪教育大学）

塚田穂高（東京大学大学院）

編著者からのリプライ：藤田庄市（フォトジャーナリスト） / 櫻井義秀（北海道大学）

### ◆「民衆宗教」研究の新展開 (2) —「民衆宗教」とフェミニズムの対話—

【第二会場 (A329) 14:00～17:00】

企画・司会：熊田一雄（愛知学院大学）

発表者：信田さよ子（原宿カウンセリングセンター）「日本の精神科医療の男性中心主義」

熊田一雄（愛知学院大学） 「天理教教祖は強い父の夢を見たか？

—宗教界と宗教学の共犯関係—」

渡辺順一（金光教羽曳野教会）「救いの場のジェンダーとセクシュアリティ

—非対称的な親密性の発生をめぐって—」

菱木政晴（同朋大学） 「『いのち』教とフェミニズム」

コメンテーター：島 蘭 進（東京大学）

## 発表要旨（個人発表）

第一会場（A324） 6日（土） 第一報告（13:00～13:50）

### ルチャ・リブレにおける儀礼性と遊戯性—メキシコ民衆文化とカトリック—

井上大介（創価大学）

本発表はメキシコ民衆文化としてのルチャ・リブレを、メキシコにおけるマジョリティ宗教としてのカトリック文化を念頭に、そこにみられる儀礼性と遊戯性という点から分析し、社会秩序に対する同文化現象の位置を考察するものである。

メキシコは周知の通り、世界でも有数のカトリック強国であり、最新の国勢調査では、国民の8割以上が信者として登録されている。一方、民衆文化においては、ルチャ・リブレ（メキシカン・プロレス）が、サッカーに次いで人気を博しており、世界でも、アメリカ、日本とともに、プロレス大国として知られている。しかしメキシカン・プロレスはメキシコ独自の特徴を有しており、カトリック文化との関連も決して見逃されてはならない。

一方、表象の次元においても、多くの日本人プロレスラーがメキシコで修行を積み、メキシカン・スタイルなるものの定着に関与しているとともに、メキシコ観光では、ルチャ・リブレ観戦が組み込まれるなど、メキシコ性の確認といったツーリズム的意味においても、ルチャ・リブレの存在は興味深いものとなっている。

発表では、このような現代性を有するメキシコ民衆文化としてのルチャ・リブレを取り上げ、そこに見られる民衆とのインタラクションによって形成された、カトリック文化と深く関連した象徴的世界観に着目し、そこでの解釈のされ方や社会的機能を分析するものである。

エドモンド・リーチは人間のコミュニケーションを1) 合理的・技術的な行動、2) 伝達的行動、3) 呪術的行動に分類した上で、儀礼的行動として、2)と3)を包含することを主張している。同主張に根ざし、エミール・デュルケームの集合表象という儀礼分析への視点を現代スポーツ研究で展開しているものとしては、マルティン・セガレンやロベルト・ダ・マタなどによる、スポーツの儀礼分析が存在している。儀礼研究においては、ヴィクター・ターナーが、コムニタスや社会劇という視点を人類学に導入し、儀礼における社会変革の可能性や、観客を含めたパフォーマンスという側面を強調している。

一方、遊戯の考察に関しては、ヨハン・ホイジンガーの「ホモ・ルーデンス」をはじめ、ドン・ハデルマンやクロード・レヴィ＝ストロース、青木保などによって儀礼と遊戯の相違点・類似点が分析されている。このような視点はルチャ・リブレを演劇、遊戯、儀礼という様々な観点から見つめ、そこでの時間、空間、ルチャドール、観客といった諸次元における分析に有意な枠組みを提供してくれよう。

報告者は、様々な文化事象を儀礼という枠組みによって切り取り、西欧的二元論から派生した非日常と日常、聖と俗といった文脈に沿った諸特徴のみを抽出するといった従来の人類学的方法論には懐疑的である。しかしそのような二元論的言説によって構築されてきた世界観というものが存在することも事実である。本論では、儀礼という枠組みを超えた日常的次元へのアプローチの重要性を理解しながらも、方法論的には、非日常と日常、儀礼的次元と遊戯的次元といったフレームを設定し、アービング・ゴフマンの提示したリフレイミングという概念を援用しながら、各フレームをダイナミックに移動する諸相の理解に照準をあて、儀礼研究の可能性を模索したい。

なお、タイトルにある民衆文化に関しては、「社会的支配者層に対する被支配者層によって形成された文化」と定義しつつ、民衆文化の性質を「流用」「アプロプリエーション」「ブリコラージュ」等の概念で説明される特徴にもとめ、ルチャ・リブレの社会秩序に対する位置関係の理解をめざしたい。

## 現代ロシアにおけるグローカリゼーションと宗教

宮川真一（創価大学）

本報告は現代ロシアにおけるグローカリゼーションの諸相について、宗教との関連から検討しようとするものである。ソ連邦の消滅を経験したロシアは、グローバリゼーションの荒波にさらされることとなった。グローバリゼーションは必然的にローカリゼーションを伴う。グローバリゼーションは世界の均一化を進める。ローカリゼーションは世界の多様性を進め、国民的・地域的な独自性を再構成させる。現代世界ではグローカリゼーションが進行している。グローカリゼーションの進む現代ロシアでは、宗教の復興が著しい。

混迷する大国ロシアには、4 つの国家的理念・国家像がある。1、自由主義や民主主義の原理に基づく「自由民主主義」。ここでは、宗教次元において政教分離を志向する。2、ソ連時代への郷愁から生じる「ソビエト連邦」への回帰志向。この場合、マルクス・レーニン主義が国家イデオロギーとなる。3、東西に跨るロシア独自の文明哲学であり、復古主義・大国主義的な「ユーラシア主義」。この場合、宗教次元ではロシア正教を重視する。4、革命前の帝政ロシアを理想視する復古主義的な「帝政ロシア」。そこではロシア正教が国教の地位を占めることになる。

1990 年に成立したロシア宗教法は、信教の自由を完全に保障していた。そのためソ連邦が消滅したあとさまざまな新宗教が外国から流れ込み、資金の潤沢な西側の宗教が布教活動を活発に展開していた。1995 年の「地下鉄サリン事件」を機に、ロシアではオウム真理教排除の動きが顕在化する。反オウム世論を背景に、1997 年には宗教法の改正が断行された。この法改正は「ロシア正教ファンダメンタリズム」に力を与えた。彼らは君主制の復活、国教としてのロシア正教会の地位を説く。そして西欧、グローバリゼーションといった敵と闘う。2002 年に惹起したロシア・カトリック排除の動きは、「ファンダメンタリズム」勢力の影響力を背景としたものであった。同年、学校教科書『正教文化の基礎』が出版されている。ロシア正教の宗派教育をねらいとするこの書は、ロシア正教会とロシア教育省の後押しを受けたものであった。「正教文化の基礎」コースはロシア全土に徐々に浸透していくことになる。

こうしたグローカリゼーションを明示的に表現するものとして、本報告では 1997 年宗教法とその成立過程に焦点を当てる。この法律はロシアにおける宗教活動を規制するものである。その前文において「ロシア史のなかで、その精神性と文化の形成及び発展における正教の特別な役割を承認し」、「キリスト教、イスラム教、仏教、ユダヤ教」がロシアの伝統的宗教であることを明文化する。さらにロシアで国家登録を済ませ 15 年以上存在する宗教団体以外には法人格を与えないとする「15 年条項」を盛り込んでいる。そのため、この法律をめぐってはロシア国内における信教の自由を脅かすものであると国際的に論争が起り、成立までは紆余曲折があった。この法改正に賛成していたのはほとんどの代議員、ロシア正教会、イスラム教、ユダヤ教、仏教などである。国民もこの法律に賛同している。一方、この法改正に反対するのは米国、パチカン、欧州諸国、各種人権団体であり、カトリック・プロテスタントの各宗派などであった。ロシア国内は賛成、諸外国は反対という構図である。この改正に至る過程は、ロシアの国家像をめぐる国際的な政治・宗教対立であった。この法改正によりロシア正教会の法的地位は上昇し、それに公認宗教としてのイスラム教・ユダヤ教・仏教が続き、カトリック・プロテスタント、新宗教・「カルト」が下層を占めるという諸宗教のヒエラルキーが形成されるにいたった。グローカリゼーションの進展により、現代ロシアの国家像は宗教次元では「ユーラシア主義」と「帝政ロシア」の混合形態にあるといえることができるだろう。



## 「異文化」としての伝統宗教—現代ロシアにおける正教復興—

藤原潤子（総合地球環境学研究所）

宗教復興についてはこれまでに多くの記述がなされてきた。それは多くの場合、民族的心性の発露として、あるいは伝統回帰運動として描かれてきた。ポスト社会主義各国で生じた宗教回帰についても同様であり、社会主義政権による宗教弾圧からの解放により人々の間に湧き上がってきたものとする語り口が一般的である。

しかし私がロシアで調査を行った際に感じたのは、伝統として語られ復興される宗教が、当事者たちにとって必ずしも自然なものではないということである。例えば、ソビエト政権による教会破壊のために数世代に渡って教会へ通う習慣を失っている人々にとって、あるいは宗教は資本家の作り出した迷信であるという無神論教育を受けて育った人々にとって、村に復興された教会は異質なものである。「祖先の信仰をとり戻すために教会に親しみたいと思っているが、そこでどうふるまうて良いのかわからないため、足を踏み入れることには恐怖を感じる」と語る人さえ存在する。復興途上にある伝統宗教は、一般には「自文化」として語られつつ、同時に「異文化」として体験されうるものなのである。

現代ロシアにおいて、宗教の選択肢は多様である。そんな中で正教を選んだ人々にその理由を尋ねると、「ロシア人だから」、「祖先が正教徒だったから」というような答えが返ってくる。民族を規定する要素として宗教が重要な位置を占めることはつとに指摘されているが、ここでは反対に民族が宗教を規定する最重要ファクターとなっている。では人々はいかにして自らの伝統宗教と出会い、とまどい一つもそれを自文化として受け止めるのだろうか。また時に、どのような理由により、民族的出自から見て伝統ではない宗教選択を行うのだろうか。

本発表では2005～06年にロシア連邦北西部の一村落で行ったフィールド調査に基づき、正教会についての語られ方からこれを論じる。この村では、革命前に存在した正教会の復興が進むと同時に、隣国フィンランドからの宣教師によって新たに建設されたルター派教会、及びエホバの証人グループが存在する。正教会に通う人、正教徒を自認しつつルター派教会に通う人、正教徒という自意識を持つがどこにも通わない人、正教を完全否定してエホバの証人に移った人などの語りから、現代ロシアにおける正教の位相と宗教選択について報告したい。

## トバ・バタック移民社会における慣習法的実践の再編とキリスト教

木村敏明（東北大学）

ある社会におけるキリスト教の受容の問題を論じる枠組みとして「分脈＝コンテクスト」という概念の重要性が叫ばれて久しい。しかしこの「分脈」という概念の含意は十分に理解されているとはいいがたく、たとえば「在来文化」といったものと同一視してしまうような平板的な理解がなされることが多いように思う。そこで本発表では、東南アジアの一都市に暮らす移民社会をとりあげ、そこにおける人的物質的文化的資源の配置の中で社会生活の再編がなされるなかで、キリスト教が社会生活の重要な一項として組み入れられていく様子を検討し、「分脈」に着目したキリスト教受容過程記述の可能性を探ることとする。具体的にはインドネシア北スマトラ州メダン市のトバ・バタック移民社会をとりあげ、彼らの社会生活の基軸をなす親族組織およびその表現としての祝福儀礼が、互助組織（祈祷会）の結成を通して都市環境の中で再編され実践されていく様子を事例としてとりあげる。

インドネシア共和国、北スマトラ州の州都メダンはおよそ 200 万の人口を擁するスマトラ島最大の都市である。かつてマレー人の居住地で小村にすぎなかったメダンは、1869 年にオランダ人ヤコブ・ニーンハウスがデリ会社を設立、この地域でタバコプランテーション開発をすすめて以降急速に発展し、北スマトラの経済的・政治的中心地となった。とりわけインドネシア独立後の 1950 年代に各地から多数の移民を引き寄せ、インドネシアを代表する多民族都市のひとつとなっている。

トバ・バタックはスマトラ島内陸の高原地帯を故郷とし、ひとつの父系クランを中核として構成された村落に、稲作農業を主な生業として生活していた。社会生活では妻や母の出身クランとの関係が重要で、それらの人々が持つとされる「霊力＝サハラ」への恐れから畏敬の念をもって接するべきであるということが強調される。人生の様々な節目に彼らを招いて祝福儀礼を執行することは、トバ社会にあって欠かすことのできない義務である。一方トバ地域では 19 世紀の後半からドイツのルター派による伝道活動がはじまり、1930 年代までにそのほとんどがキリスト教に改宗している。

メダンにおけるトバ・バタックコミュニティが成熟していった 1950 年代になると、多くのクランが競い合うように互助組織を結成した。また、トバ・バタックが比較的集中して暮らす地域では、近隣同士が互助組合を作る例も見られるようになった。これらの組合はメダンにおいて分散して暮らしているトバ・バタックたちに、慣習法に基づいた社会活動とりわけ祝福儀礼をおこなうための人的物的基盤を提供する機能を果たしており、これに参加しないことは社会生活上重大な支障をきたすことになりかねない。

一方、これらの互助組合の定例集会はキリスト教式の祈祷会の形式でなされ、キリスト教式の祈祷、説教、賛美歌などがその場で実践されることが普通になっている。現在のメダンではむしろこれらの互助組合そのものが「祈祷会＝パルタギアンガン」という言い方で呼ばれるほど、キリスト教と切り離すことができない。そこではキリスト教の教義に照らしたトバ社会や慣習法的実践の意味づけや批判がおこなわれる一方、教会のヒエラルキーから逃れ社会生活に密着したキリスト教的実践の再生産の場となっている。

本発表では互助会の具体的な活動を実態調査や規約の分析を通して明らかにしつつ、それが都市社会でトバ・バタック移民たちが直面した変化を受け止め、慣習法的な実践を維持する役割を果たす一方、キリスト教を彼らの社会生活のなかへと織り込む機能も果たしていることを明らかにする。そしてこの事例をふまえた上で、キリスト教の「分脈化」に関するビヴァンスらの理論を参照しつつ、キリスト教受容の問題を在来文化とキリスト教という二項対立的図式にたよらずに記述する理論的枠組みを検討する。

## 現代サンティアゴ巡礼における交流と真正性—共同体から共同可能性へ—

岡本亮輔（筑波大学大学院）

本発表では、現代サンティアゴ巡礼について、交流・体験・真正性をキーワードにして考察する。サンティアゴ巡礼とは、その名の通り、12 使徒のひとり聖ヤコブの墓所があるサンティアゴ・デ・コンポステラを目的地とする巡礼である。サンティアゴへの巡礼は 9 世紀にヤコブの墓所が発見されたことに始まり、11～12 世紀に隆盛をきわめた。サンティアゴはエルサレム、ローマと並ぶキリスト教の三大聖地とされ、現在でもガイドブック等ではしばしば「中世以来の…」といった表現と共に紹介されている。しかし、サンティアゴ巡礼のイメージの典型である徒歩や馬での巡礼者数の変遷をみると、ヤコブの聖年にのみ突発的に増加しているだけで、コンスタントに 10 万人を超えるようになったのは 2005 年前後であることが分かる。

20 世紀末以降のサンティアゴ巡礼興隆の契機として考えられるのはヨハネ・パウロ II 世の訪問、巡礼路の世界遺産認定、同巡礼を題材にした一連の小説・エッセイ・映画などである。特に P・コエリョ『星の巡礼』と Sh・マクレーン『カミーノ』は、「自己を見つめ直す」「本来の自分を取り戻す」といった動機と共に多くの巡礼者が巡礼の契機として挙げる著作である。こうした点をふまえれば、現代のサンティアゴ巡礼は、制度的に公認された伝統的な宗教実践というよりも、ニューエイジやスピリチュアリティといった潮流と強く結びつき、各個人の霊的嗜好やツーリズムといった私事性や従来の意味での非宗教性なども含んだポスト世俗化の宗教性を反映するものとして捉えることができるだろう。そして、その点で興味深いのがサンティアゴ巡礼における真正性である。多くの巡礼記や巡礼者たちの語りにおいて中心となるのは「他の巡礼者や地元の人々との出会い」とそれがもたらす「自己の変化への気づき」である。つまり、現代の巡礼者においては、目的地サンティアゴへの到着よりも、その道程での他者との交流が重視され、それを通して巡礼体験の真正性が吟味されているのである。

巡礼路に生きるホストと巡礼者であるゲストの間では、「ゲストが表象するホスト像」から逸脱しない形での交流が「本物」だとされる傾向がある。つまり、ゲストが抱く一種のオリエンタリズムにホストが共犯的に参加することで真正な巡礼体験が生み出されており、エスニック・ツーリズムと同型の構造が指摘できる。そして、さらに重視されるのがゲスト・ゲスト間つまり巡礼者同士の交流である。サンティアゴ巡礼では巡礼者同士の結びつきがきわめて強い。現地で偶然知り合った他の巡礼者と数日間から時には 1 週間以上一緒に歩くことが頻繁に生じる。そして巡礼期間の長さや巡礼路の困難さがゲスト同士を親密にし、つながりが育まれ、「本来の自分」や「本物の友情」といった感覚が供給されるのである。

このように現代サンティアゴ巡礼においては、一般的に語られる「中世以来」「西欧の伝統」「キリスト教三大聖地」といったイメージとは異なり、個々人の偶然的で流動的な交流体験を通じて真正性が調達されている。サンティアゴ・デ・コンポステラという場所がまとう聖性とそれに基づく求心性ではなく、それらを後景とした偶発的な他者との出会いが重視されているのである。そしてその意味では、現代サンティアゴ巡礼は、確固とした「共同体」とその歴史伝統に裏打ちされたものではなく、より希釈された「共同可能性」という形で「つながることが可能な舞台」として受容されているといえるだろう。

## 聖地巡礼・ツーリズム・アニメーション—埼玉県鷲宮神社の事例を中心に—

今井信治（筑波大学大学院）

近年、アニメやマンガなどの舞台となった場所を訪れることが「聖地巡礼」と呼ばれ盛んに行われている。しかしながら、その「聖地巡礼」とはどのような実践であるのかを宗教学の立場から取り扱った研究は未だ少ない。本発表では、主にアニメ「らき☆すた」（2007年4月～9月放送）の舞台となった埼玉県・鷲宮神社に奉納された小絵馬の分析を通じてアニメ「聖地巡礼者」へと接近し、その「聖地巡礼」が有する意義について論じたい。

鷲宮神社は、アニメ「らき☆すた」放送以前においても「関東最古の神社」として著名であり、2007年初詣参拝者13万人（県内7位）を誇る神社であった。そこへ2007年初夏以降に「聖地巡礼者」が訪れるようになり、2008年の初詣期間には前年から17万人増の30万人（前年比231%、埼玉県内3位）、2009年には更に12万人増の42万人（同140%、同2位）が参拝している。本事例において特筆すべきは、鷲宮町商工会が版權元とタイアップして「公式参拝」イベントを行う、特別住民登録したキャラクタの住民票を頒布する、同神社の祭りに「らき☆すた神輿」を出すなど、地域が「聖地巡礼」の盛り上がりを機に、積極的に旅客誘致へと乗り出していることである。また、そうしたイベントの企画・立案にファンが携わっていることも見逃せない。当地はアニメの舞台としてまなざされているため、ファンを取り込みつつ、そのイメージと齟齬をきたさない観光資源を産み出す努力が随所に見受けられる。

アニメで描写されている風景を探し出すことがこの「聖地巡礼」の肝であるが、鷲宮神社に掛けられている多くの絵馬もまた、「巡礼」の記念物ないし観光資源として欠かせない。絵馬掛け所にはアニメなどのキャラクタが描かれた絵馬が多く奉納されており、従来の絵馬のイメージから掛け離れた様相を呈している。本報告では、2008年上半期に奉納された絵馬の分析を通じ、アニメ「聖地巡礼者」がそこに託す想いを汲み取ることを目的としている。調査ではアニメやマンガに関わる絵馬に着目して偏差を算出し、結果、本殿や社務所からは目が届かない場所にこれらの絵馬が多く掛けられていることがわかった。また、個々の祈願内容へ目を向けると、アニメやマンガに関わる絵馬は祭神と奉納者による1対1の関係を構成するものに留まらず、他の絵馬へと言及する内容も散見され、WWW上の掲示板が想起される。祈願には鷲宮神社に対する信仰心を動機として参拝しているのではないことに引け目を感じている記述もあり、神社ならびにその関係者からは少し距離を置きつつ、絵馬を用いて他のアニメ「巡礼者」とのコミュニケーションを図ろうとしている様子が窺えた。他のアニメ「巡礼地」では地域住民が「聖地巡礼」という語の含む宗教的ニュアンスを疎む、出版社側がアニメ「聖地巡礼」の自粛を呼び掛けるといった例が知られており、総じて、「巡礼者」には幾らかの自重を含みつつも「聖地」を訪れた記念を残したい、同好の士と交流を図りたいという欲求が読み取れた。

こうした事例を踏まえ、本発表では、アニメ「聖地巡礼」を伝統的な巡礼と同質な実践とみなすことは困難であるが、巡礼と観光とを二元的に対立させることは得策ではないという立場を取る。そして、アニメ「聖地巡礼」の実践者はアニメの世界に豊かな意味を見出しているという点を鑑み、E. Cohenの提起する観光経験の類型論を取り入れた考察を試みたい。Cohenは、『『選び取った』精神的中心、すなわち自己の社会や文化の主流とは異なった中心に完全にコミットする旅人』を「実存モード」を旅する者と捉えた。「聖地巡礼」と呼称されながらも、伝統的な巡礼と同一視されることのないこの実践に対し、観光社会学の理論を取り入れることで一層の理解を深められると考える。

## オルトヴィン・ヘンスラーのアジール論とアジールの現在

舟木徹男（龍谷大学）

本発表では、本邦において断片的な紹介にとどまっていたアジール研究の代表的業績、オルトヴィン・ヘンスラーOrtwin Henssler 著『アジール法の諸形態—ゲルマン世界における広がり FORMEN DES ASYLRECHTS und ihre Verbreitung bei den Germanen』（1954）の全般的な内容紹介を前半で行い、後半ではそれを踏まえたうえで、アジールの現在についての発表者の考えの一端を、精神病理との関連で発表したい。

### 1. ヘンスラーのアジール論

1970年代末以降の阿部謹也と網野善彦の活躍によるアジール論の隆盛にもかかわらず、両者がその著書で参照しているヘンスラーのアジール論は、これまで邦訳されないままであった。

本書は二部構成からなる。第一部では、従来のアジール法研究がもっぱら法学者によって血縁復讐の抑止という機能面からのみ行なわれてきたことの一面性をヘンスラーは批判し、アジールの根底にある聖性 **Heiligkeit** を重視する立場をとる。ヘンスラーはアジール法を「一人の人間が、特定の空間、人間、ないし時間と関係することによって、持続的にあるいは一時的に不可侵なものとなる、その拘束的な形態」と定義した上で、アジールが歴史的にたどる形態変容の一般的過程を三段階に整理している。すなわち、（1）「宗教的・魔術的段階」（2）「実利主義的段階」（3）「退化・終末の段階」である。発表ではこの三段階説について紹介する。

ヘンスラーが「本書の主要部分」と呼ぶ本書第二部では、古ゲルマン世界におけるアジール法を「場所のアジール法」「人のアジール法」「時間のアジール法」に分類したうえで、中世北欧の地域法書やアイスランド・サガなどを主な資料とすることで、それらの具体的な形態を具体的に解明している。この三種のアジールについて、それぞれの一般的特徴を紹介する予定である。

### 2. アジールの変容—治癒 **Heilung** の観点から

ヘンスラーの三段階説によれば、アジールは法制度の上では近代国家の成立とともに消滅したことになる。しかし、アジールが聖性にかかわるものである以上、それは近代においても何らかの変質した形態で存続しているはずだと考える立場から、今回の発表ではとくに聖性 **Heiligkeit** の一側面としての治癒 **Heilung** に的をしぼって、アジールの現在を考察したい。問題の立てかたとしては、まず近代人の神経症の病理構造を明らかにしたフロイト理論において症状形成の一環をなしている「無意識的空想への退行」を、「アジールへの避難」の一形態としてとらえる。その上で、前近代においてアジールは心身の治癒 **Heilung** をもたらしたはずであるのに、なぜこの近代的形態のアジールは、神経症的な病苦をもたらすのかという問いを立てる。

しかる後に、聖性と治癒（あるいは病理）のあいだの関係を、前近代的なあり方から近代的なそれへと変質させた契機を、キリスト教化の影響と個人の成立、社会の合理化、および資本制経済の発達などとの関連から考察したい。議論を進めるに際して、医療人類学の諸文献や、S. フロイト、M. ウェーバー、M. フーコーらの諸説を参照する予定である。

## ルイス・ファラカンの非一貫性—1984年と2008年のアメリカ大統領選挙から—

山下壮起（同志社大学大学院）

ネイション・オブ・イスラーム（以下 NOI）は、現代の黒人社会においてもある程度の影響力を維持している。その背景には、ブラックナショナリズムを基盤にした独特の教義と指導者ルイス・ファラカンのカリスマが挙げられる。ファラカンが指導者となるまで、NOI は黒人解放運動の宗教的中心として、保守的であった黒人教会を批判し、アメリカ政治への参与に疑問を投げかけてきた。しかし、1984年に公民権運動の指導者の一人であるジェシー・ジャクソンが出馬したことで、NOI は大きな転換を見せたのである。ファラカンは、以前 NOI が批判し続けてきた黒人教会との連帯を強め、黒人社会への影響力を強化した。また、黒人政治家の増加によって、それまでの教団が消極的であったアメリカ政治に積極的に参与する姿勢を見せるようになった。

黒人教会との連帯によって黒人社会での支持基盤を拡大したファラカンは、ブラックナショナリズムのリーダーとして黒人社会の感情に即した終末論的発言を行うようになった。しかし、ファラカンの終末論は、時代によってその内容に矛盾が見られる。それは、アメリカに対する黒人社会の感情の変化に対応するためであった。黒人社会からの支持を維持するために、ファラカンの発言に非一貫性が生じたのである。本発表では、こうしたファラカンの非一貫性をジャクソンが出馬した1984年の予備選挙戦とバラック・オバマが出馬した2008年の大統領選挙戦の比較を通して分析するものである。

ファラカンは、ジャクソンとオバマ両者の選挙戦に対して、終末を意識したスピーチによって言及しているが、その内容は全く異なった傾向を見せている。それは、両者の違いによるものと考えられる。選挙戦を通して、ジャクソンがマイノリティ、特にアフリカ系アメリカ人への優遇政策を公約に挙げたのに対して、オバマはアメリカにおける多様な人々の融和を強調している。ただ、両者は、共通してファラカンの反ユダヤ的発言を理由に訣別している。ジャクソンは、ファラカンが反ユダヤ的発言によってメディアから批判を受けた後に訣別を表明した。また、オバマは、最初からファラカンと彼の反ユダヤ的発言から批判している。

ファラカンは、このような批判を受けた後も両者に対する支持を続けた。このように、全く違った傾向を見せるアフリカ系アメリカ人の政治家を支持するところに、ファラカンの非一貫性が現れている。また、NOIの基盤となっているブラックナショナリズムとは正反対の価値観から選挙戦を繰り広げたオバマを支持し続けたところにも、ファラカンの非一貫性が現れている。そこには、ブラックナショナリズム的思想よりも、その時点での黒人社会の思いに共感を示すことによって、彼らからの支持を維持しようというファラカンの意図が見られる。

ファラカンは、三十年の歴史をかけて、黒人社会での支持基盤を獲得し、ブラックナショナリズムのリーダーへと成長した。そして、黒人社会からの支持によって、教団を経済的に自立させることに成功した。それによって、大企業などの出資者によって拘束を受けるメディアや宗教団体には見られない、自由な発言力を得た。一方、黒人社会からの支持によって成り立つ NOI の体制を維持させるために、黒人社会の感情に即した見解を発信していくことが必要にもなった。つまり、黒人社会がアメリカに大きな期待を寄せるとき、ファラカンもアメリカへの対決姿勢を軟化させ、黒人社会がアメリカに批判的なときには、ファラカンはその先頭に立ってアメリカ社会を厳しく批判するのである。こうした背景から、ファラカンの発言に非一貫性が生じてくるのである。しかし、彼の発言の非一貫性が現れた背景には、教団の体制維持のために、状況によって変化する黒人社会の感情に訴えていく必要性があったといえるだろう。

戦後政治のなかの沖縄キリスト聯盟  
—「新沖縄」建設をめぐる地域社会の対立と葛藤—

一色 哲(甲子園大学)

発表者は、これまで主として米占領軍と沖縄のキリスト教との関係に着目して、戦後沖縄キリスト教史を捉えてきた。米軍は沖縄の軍事占領を円滑に進めるためにキリスト教を宣撫工作の一環として利用してきた。一方、沖縄のクリスチャンは、当初、米軍のチャプレン（従軍牧師）や熱心なクリスチャン兵士たちを戦後復興の同労者と考えていた。しかし、東アジアでの冷戦激化にともない占領体制そのものが変質していく過程で、沖縄教会の牧師・信徒のなかには米軍の意図に気づき、占領体制に対して異議申立の意思表示をする者もあらわれた。

しかし、米軍との対比のみで沖縄キリスト教史を見ると、沖縄の地域社会や沖縄教会の内部にある矛盾や軋轢、また、その両者間にある緊張関係などを見過ごす恐れがある。沖縄人は、占領体制下でも、現在でも、決して「一枚岩」ではない。そこで、本報告では、1940年代後半、戦後復興めぐって沖縄住民のなかに様々な思惑が交雑している戦後政治の文脈に、沖縄のキリスト教を位置づけることで、「新沖縄」の建設を模索するなかで生じた沖縄人指導部や沖縄教会に生じた対立や亀裂、葛藤を探究していきたい。このような視座はキリスト教史研究では余り見られないものではないかと考えている。

沖縄の戦後政治は、1945 年 8 月 15 日、占領軍による沖縄諮詢会（以下「諮詢会」）の招集にはじまったことは知られている。しかし、すでに、それ以前に民間人捕虜収容所（沖縄島での戦闘の最中に米軍に保護された人々が収容された）では「市長」や「村長」の選挙（選定）が米軍も関与して行われており、その時点ですでに「政治」が生まれていたといえる。諮詢会とその後継の沖縄民政府（以下「民政府」）については議事録が公刊されている。また、諮詢会の 15 名の委員（幹部）のうち幾人かの手記や評伝がある。それらを見ていくと、戦後復興後と「新沖縄」の建設をめぐって、沖縄人のなかにも様々な思惑があったことがわかる。当時、「斬り込み」と称して米軍から「戦果」を挙げ、それを日本本土や台湾・中国大陆へ「密輸」する者も相次いだ。彼らにとって、戦後の混乱状況はその後の成功の足がかりとなった。また、沖縄戦でインフラや社会組織が破壊された。それゆえに、必要な情報の先取や物資の配分の権限をめぐって沖縄人のなかにも新しい「権力」や「政治」が発生する。

この一連の政治過程では、戦後沖縄教会の中心となったいくにんかの人物の思惑が垣間見える。その者たちが中心となって結成したのが、沖縄キリスト聯盟である。1946 年 2 月 6 日（「1947 年 1 月 9 日」説もあり）に結成されたといわれる沖縄キリスト聯盟は、他では「沖縄キリスト教連盟」とされることもあるが、当事者たちは「キリスト教の連盟」ではなく、「救い主・キリストを頭(かし)とする連盟」という意味で捉えているので、報告者は「沖縄キリスト聯盟」という表記が妥当であると考えている。これに象徴されるようにこの組織については未解明の点が多くある。しかし、近年、報告者が発見した文書により、その実態が明らかになりつつある。そして、この聯盟に参加した個々の人物についても次第にその輪郭が明らかになってきている。

本発表では、これら新資料の発見や人物像の研究の成果をふまえて、それを諮詢会・民政府の人脈・党派、政治行動と関連づけていく。そして、当時のキリスト教界の指導者たちも、「一枚岩」ではなく、現実政治のなかで対立する党派やグループにそれぞれ分かれて、それぞれの意図や思惑で活動してきたのではないかとすることを立証する。また、沖縄教会関係者たちは、「新沖縄」を構想めぐってそれぞれの党派・グループに別れて行動した。本報告では、そのなかでおこった対立や葛藤を実証する。

## 集合的記憶の生成的局面—沖縄における遺骨収集の現代的展開—

栗津賢太（南山大学 南山宗教文化研究所）

本報告の目的は、沖縄における遺骨収集の展開とその動態を、社会学における集合的記憶研究の枠組から理解しようとするものである。

「鉄の暴風」が巻き起こったと表現されることもある、国内唯一の地上戦が行われた沖縄では、わずか3カ月の間に20万を超える死者を出した。これは米軍の艦砲射撃、爆撃、上陸戦、掃討作戦による死者であり、敵味方両陣営の軍人・軍属の他、民間人の犠牲者である。こうした犠牲者たちの表象でもある遺骨は独特のオーセンティシティの問題を提起している。本報告では、今なお国内における遺骨収集が行われている沖縄において、遺骨をめぐる様々な行為主体の動きを考察の対象とする。

見落とすべきではないのは、遺骨収集が地表遺骨の処理に始まり、埋没遺骨の探索へと変化してきたことである。敗戦直後から、遺骨収集は疎開地や仮捕虜収容所から帰った住民たちのやむにやまれぬ行為として始まった。その意味で、それはヴァナキュラー（vernacular）な行為であったといえるだろう。

実際の遺骨収集という行為を考えてみよう。遺骨収集では、人は個人ではなく一定の集団として行為する。その意味で収骨作業はそれ自体協働的な行為である。さらに収骨された遺骨は、慰霊祭、納骨に至るまでに様々な集団の手を経てゆく。それぞれが独自の組織と目的を持っている。そして、遺骨収集という複合的な協働行為によって参加者は意味を与えられ／意味を見出す。

現在の遺骨収集は、世代が代わり、戦争経験や直接肉親が戦争とかわかっていない人々によって担われようとしている。それは探索された遺骨であり、直接的な関係者でない者たちにとっても、それは手を合わせるべき存在であり、何らかの慰霊行為が行われ、新しい意味が見出されている。とりわけ遺骨収集が様々な集合的行為者（agency）によって行われている沖縄ではこのことは顕著である。エージェンシーの参画によって、意味的な変容も促進されている。戦後64年を迎える現在の日本でも遺骨の持つ喚起力は失われていない。その意味で、沖縄における集合的記憶は常に生成され続けているといえるだろう。遺骨収集に関連する動き、集団自決の問題に対する激しい抗議にしても、贖われていない過去からのレスポンスであり、集合的記憶からの現在の社会状況や国家に対するレスポンスであると考えられる。



## 墓のメディア性に関する一考察—鹿児島県南薩・奄美の事例から—

福ヶ迫加那（鹿児島大学大学院）

本発表の目的は、墓が實際上、どのような社会的機能をもつのかを考えることにある。そのために着目するのは、「語る」「つなぐ」という墓のメディア性である。墓は人々の何を語り、何と何をつなぐのか。そして、墓が「語る」「つなぐ」ことによってどのような関係性が生じるのか。より具体的には、墓花の状態、家墓から共同納骨堂への移動や新設、その管理の変化などから、墓の機能や人々が墓に求めるもの（墓の「表出性」）と、墓のとりもつ人々のさまざまな関係性（墓の「媒介性」）を探る。

研究対象は鹿児島県指宿市山川地域の井手方墓地と下原共同納骨堂、鹿児島県大島郡宇検村の田検集落にある「精霊殿」と呼ばれる共同納骨堂である。なお、研究方法としては現地調査で得られた資料に基づいて比較考察を行う。

井手方墓地では「花合戦」という墓花の豪華さや徹底した墓管理を競い合うような現象が見られたが、その背景には墓花が管理者の持続的な墓花管理・健康・動静などについて「雄弁に語る」という指標性が存在する。なお、この指標性は「はかる」「気遣う」という形で管理者と周囲の人々を「つなぐ」ことも可能にしている。また、この地の墓において生じた花瓶の削減や造花の使用という現象を管理負担・経済的負担の軽減という側面からだけ捉えるのではなく、「語りの抑制」という視点から提示する。

「語りの抑制」としては、同地域の下原共同納骨堂の新設・管理をその延長線上にあるものとして位置づけている。この施設の管理規約や花入れの共同化といった事象からは、下原共同納骨堂が墓花のもつ「雄弁な語り」を抑制している墓であることがわかる。ただ、ここにおいて共同化されたのは墓花だけであり、墓の構造としては個別の納骨・参拝スペースを保持する形態がとられている。これは納骨堂を共同利用する人々が差異化を求めていることの表れであり、人々が墓を「分有」している状態にあることを「語る」ものである。下原共同納骨堂においては、こうした差異化を前提とした上で、共用の線香立てや各納骨スペースに設けられた線香立てに対して、線香を供えるという行為を繰り返すことによって、「ゆるやかなつなぎ」が生成されている。しかし、共同祭祀や先祖の共同という現象はみられない。

他方、田検「精霊殿」は田検集落という1つの集落を共通項とする人々のための墓として生み出されている。田検「精霊殿」においては参拝スペースを集合化することで、集落民が墓を「共有」する形になっている。その結果、集落民個々についての「語り」は弱いが、集落と集落民を「結合」という関係性が生じており、「集落のご先祖様」という先祖の共同が可能となっている。このことは個別の先祖であるよりも祭り手の枠を広げることにつながり、集落による墓管理の持続性を高めることにもなっている。さらにその関係性は集落による定期的な管理や利用者共同の儀礼サイクルのような、ともに集い働く機会を設定することで強化されており、こうした事実が集落と集落民を「つなぐ」という媒介性と集落の統合性および永続性を雄弁に「物語る」。そして、こうした墓をめぐる生じる活動は集落に調和もしくは統合をもたらすものとして働く可能性も持ち合わせている。

以上をふまえて、本発表ではまず、墓のメディア性というものが墓花や共同納骨堂の形態の場合にはどのように立ち現れてくるのかを整理したい。そして、そこに生じるメディア性とはどのようなものであり、人々の求めが墓という形で一旦、形態化されることによってどのような作用がもたらされるのかということを考察していきたい。

キリスト教における「性的指向」概念援用の陥穽  
—「承認」を求める運動戦略への批判的考察—

堀江有里（立命館大学）

1990年代に入り、ジェンダー／セクシュアリティをめぐる社会運動において、「アイデンティティ」を軸とした政治に疑義が呈されるようになった。そこには、①ひとつの属性を主軸とした運動があたかも「一枚岩」であるかのような状況を提示し、マイノリティのなかでも周縁化される人々が生み出されたこと、②ひとりの人間のなかにある多層的な属性のうち一要素が突出したかたちで表明され、かつそれが固定的なものであるかのように表象されたことという、大別すれば二つの理由が存在する。

このような疑義に対して、「アイデンティティ」を軸とした政治／運動の必要性がなお有効であるとの主張もある。というのは、人権や人々の承認を求めるためには集合行動が不可欠となるという社会運動の根本的な意義を、いまもなお、「アイデンティティ」を軸とした政治／運動が持ちうる可能性が見出されているからである。そこでは、「アイデンティティ」とは、もはや固定的・永続的なものとして把握されてはいない。

本発表では、上記二点の理由を提示するような「アイデンティティ」への疑義が生まれてくる背景やそこでとりこぼされている側面を、同性愛者の当事者運動に見出し、限界性と可能性を考察することとしたい。具体的には、キリスト教の事例を取り上げることとしたい。この事例を取り上げる意義は以下の二点にあると考える。すなわち、①宗教という“人智を超えた言説”が用いられる枠組みのなかで、しかし同時にその構成員は〈外部〉にある社会規範による多大な影響を受けているという特徴を見出すことができる点で矛盾をはらんでいる様子が観察できること、②「キリスト教は同性愛者を排除する宗教である」、「欧米はキリスト教が強いから、同性愛者に対する差別が行われる」という、いわゆる〈一般社会〉での言説がしばしば聞かれるほどに、とくにキリスト教が同性愛者排除を推進する宗教として認識されることが多いこと、である。

とくに 1980 年代以降、キリスト教においては、一方では北米を中心に同性愛者排除の言説が強くなるとともに、他方では、同性愛者たちによる対抗手段として「承認」や「受容」を生み出すための当事者運動が広がってきた。後者は、同性愛者当事者のみならず、同性愛者の子どもをもつ親や友人たちなど、いわゆる「支援者」たちを巻き込んだ運動を展開している。

ここで注目したいのは、対抗手段として用いられる「承認」や「受容」を生み出すための振る舞いとその言説である。一例を挙げれば、「性的指向 (sexual orientation)」という概念の使用がある。同性愛者は、性的な「趣味・嗜好」や「選好」 (sexual preference) として認識されることによって、スティグマが付与され、「治療」の対象とされた時期があった。そのような認識に対し、「同性愛者であること」を変更不可能もしくは困難なものであると主張するために、「性的指向」という概念が援用されることとなった。たとえば、いわゆる一般社会におけるゲイ解放運動では、「性的指向」概念は、同性愛／異性愛とも社会構築的な要素を強調するために「発明」された概念であったが、それがキリスト教において援用されるときに、“神に与えられたもの”として解釈され、変更不可能性もしくは困難が強調されていく傾向を生み出すこととなった。

言葉やその定義は、文脈によって変化しうるものである。しかし、このような変化が生み出されたがために、「アイデンティティ」を軸とした政治／運動は、さらに限界を露呈することとなったとも解釈することができる。このような事例の文脈を丁寧に読み解くことにより、あらたな「アイデンティティ」を軸とした政治／運動の可能性を模索したい。

## 石原莞爾に於ける宗教と国家—東亜連盟期から戦後の運動を中心に—

内村琢也（創価大学大学院）

旧日本陸軍将校・石原莞爾（1889-1949）は、「満州事変」の立て役者、「世界最終戦争」の提唱者、国粹的日蓮主義者などとして知られている。石原研究、中でも東亜連盟期のものに関しては、これまで桂川光正氏、野村乙二郎氏、松沢哲成氏による歴史学的考察が中心であった。一方、宗教社会学に於ける石原研究においては、西山茂氏が「賢王信仰の系譜」という論文の中で、石原莞爾の思想及び東亜連盟運動の性質について論じている。

発表者は修士論文「近代日本の東亜連盟運動」に於いて、上述の野村氏が編纂した資料『東亜連盟期の石原莞爾資料』（同成社、2007年3月刊。未公表の東亜連盟期の石原莞爾日記および書簡・文書が収まっている）をもとに、従来顧みられなかった1941年の陸軍退役後に展開した「東亜連盟運動」の思想内容、組織の実態、運動の方向性などを可能な限り解明し、さらに戦後、彼が唱道して行った「西山村づくり」の在所に赴いての現地調査を通して、従来の石原莞爾論の再検討・修正をめざした。

本発表では「石原莞爾に於ける宗教と国家—東亜連盟期から戦後の運動を中心に—」というタイトルで、主に東亜連盟期と戦後の運動について考察したい。東亜連盟期とは1939年9月～1946年1月の約6年間の期間を指すが、本発表では1941年3月（陸軍退役）以降からGHQによる東亜連盟同志会解散に至るまでの民間人・石原莞爾の思想及び、彼が指揮を執った近代日本に於ける東亜連盟運動と宗教・国家の関係性を対象とする。特に石原莞爾の造語である（東亜連盟運動が）「準宗教運動」であるとの記載は、1941年10月5日、東亜連盟協会中央参与会員第2回全国大会会議における講演速記の中で初めて明らかにされた言葉であることに注意したい。ここで問題となるのは、“何故彼がこの時期に、準宗教という要素を運動の主軸たらしめようとしたのか”ということである。同問題を検討する上で、当時の国家及び社会情勢、東亜連盟協会の組織的内実、石原個人の社会的立場という3点に焦点をあてたい。

次に戦後の運動として、1946年以降の石原莞爾の西山村（現山形県遊佐町）入植とそれを期として行われた宗教運動である「西山村づくり」について論じる。東亜連盟同志会解散後、東亜連盟運動は運動がかつて有した宗教以外の要素をそぎ落とし、「西山村づくり」という日蓮主義的共同体づくり（精華会を中心とした理想郷づくり）へとシフトする。その「西山村づくり」の思想的柱として用いられた石原著「我等の世界観」を検討し、あるべき理想としての「村づくり」が現実の「村づくり」にどの程度反映されたのかを解明する。現実の「村づくり」に関連する事柄として、農村工業のあり方をめぐる争い、西山村づくり憲法の制定、「西山農場」運営の実態—地元農家出身組と都会出身のインテリ組の争い—、西山村の修練道場「日輪講堂」の設置（由来）とその宗教的機能、「日蓮教」の確立等、当時の「村づくり」の内実に触れる。

以上のような、新資料に基づく「東亜連盟運動」の理念の検討を通して、この運動が石原独自の宗教観に端を発した運動であるとはいえ、日本民族優位論に基づく東条英機らの陸軍首脳の大東亜共栄圏構想や田中智学らの国家主義的な日蓮主義運動と異なり、「五族共和」をめざす文化運動・道義運動という独特の性格をもった開かれた社会運動であること、彼自身は「準宗教運動」「誠心の回復運動」とも呼び、支那事変の早期解決に奔走したこと、ある種の平和運動としての側面も有していることなどを明らかにする（ただし戦中、最終戦争論でとなえられた戦争によって最終的に世界平和がもたらされるという彼の主張には注意を要することを確認したい）。ある意味で、東亜連盟運動が平和運動の性格を有していたことにより、戦後の運動「西山村づくり」へと展開していったと考えられる。本発表で解明する石原莞爾像は、従来の研究に新たな視座を提供しうるものと確信する。

日蓮系新宗教の歴史的展開と現世への応答  
—真理の排他的独占と現世肯定の関係を中心に—

大西克明（東洋大学 東洋学研究所）

日蓮仏教の宗教思想は、他宗教を拒否し妥協せず、時には積極的に問い糾すといった真理の排他的独占を強調する宗教伝統がみられる。このような日蓮仏教における宗教思想を日蓮系新宗教はどのように受け容れ、また、その運動過程でいかに展開させていったのだろうか。

本報告では、本門佛立講系の諸教団、並びに創価学会を事例として、日蓮系新宗教の歴史的展開を教団における解釈構造のバリエーションに着目し論じていく。ただし、「セクト」論で用意された真理の排他的独占が現世拒否と結合するところに宗教運動展開の要因を看取する視座では、真理の排他的独占と現世肯定の結びつきの論理を適切に捉えることはできないであろう。つまり、日蓮系新宗教は、真理の排他的独占を強く訴えると同時に、現世利益を約束する現世肯定の思想をも大胆に主張するからである。すなわち、日蓮系新宗教は、真理の排他的独占を以って現世を「問題化」とすると同時に、「欲望の充足」を伴う現世肯定を説く。ここに「セクト」とは異なる現世への介入を推し進める論理が見出せる。

その嚆矢として長松日扇（1817-1890）による本門佛立講が挙げられる。他宗教を拒否する日蓮仏教の宗教伝統を、現世利益を保障するものとして解釈し、現世への介入を推進する論理を打ち出した。これは、現世的志向を単に強調に留まらず、自教団の宗教的正統性を示す教団レベルにおける解釈図式をも導出している。長松日扇による現世利益の強調は、在家信者による在家主義路線を内包させていた。その後の本門佛立講系の一部（浄風教会）は、出家仏教（出家僧）を否定する在家主義を展開させ、自教団の宗教的正統性を獲得していった。また創価学会は、独自の戒壇論を媒介させることによって、真理の排他的独占と政治社会の領域への参加を結合させた。

このように、日蓮系新宗教の歴史的展開をみることで、それぞれが独自の現世への応答を示していることが見出せるが、一方で、信者レベルにおける現世利益の受容のあり方には大きな変化は見られない。つまり、信者レベルにおける現世への応答は真理の排他的独占と現世利益の結びつきにおいて共通している。にもかかわらず、現世社会への応答の教団レベルにおけるバリエーションの多寡はなぜ生じるのであろうか。これは、自教団の正統性獲得のために、真理の排他的独占が教団レベルで解釈上の変化が生じているからだと考えられる。

日蓮系新宗教の運動展開を考察するには、日蓮仏教で既に用意されていた真理の排他的独占が、現世利益と結合して現世肯定を推し進める信者レベルにおける一貫性と、他方、自教団の正統性獲得として機能し、時代社会状況に応じて可変性を有している局面を同時に見ていかなければならない。ここから、現世肯定を共通基盤としつつも、現世を「問題化」する多様な局面の比較が可能となるのである。

## 民衆宗教としての天理教の発生と新宗教への展開―幕末維新期における宗教革新―

岡尾将秀（大阪産業大学）

天理教は宗教学や宗教社会学においては、「新宗教」に分類される。なぜなら天理教は近世の「民俗宗教」を基盤として、日本の近代初頭といえる幕末維新期に発生したといえるからである。これに対して、歴史学や思想史学において、天理教は「民衆宗教」の一つとみなされることが多い。なぜなら天理教は特権をもたない民衆によって担われ、教祖は特権をもった宗教家や為政者に対抗したからである。本報告では、天理教が民衆宗教として発生してから、新宗教へと展開していったと捉え直すことによって、スタークが世俗化の反作用の1つと論じた「宗教革新」の過程を飛躍なく説明する。

天理教が民衆宗教として発生したと捉えたのは、天理教の教祖中山みきが天保9(1838)年の「立教」以降、生活共同体の成員の様々な危機を個別に解消する民俗宗教の構成要素を、すべての人間のあらゆる危機を一般的に解消する観点から構成し直していったからである。すなわち家族の病気を治癒するために実施された修験道の儀礼の様式から逸脱して、日常的に神がかかるようになり、不特定の人々に病気治しの簡易な呪術を実施しつつ、主宰神の働きであらゆる病が治るという教えを口頭で説いていった。

天理教の民衆宗教としての発生は、従来の民俗宗教より一般的な救済を追求する過程であったという点で、「宗教革新」の第1の局面といえる。しかしまだ一般的な救済の根拠が特定されていない。それゆえ中山みきは一人の「生き神」として安産や病気治しをもたらすかぎりで崇拝されたものの、唯一の教祖として崇拝されるには及ばなかった。その結果、みきによる病気治しの噂を聞いて中山家の屋敷を訪れる参拝者の一時的な集まりと、不特定の人々にみきから習った簡易な呪術を実施しつつ、みきの教えを伝えていく信徒たちとみきとの個別的な関係ができるにとどまった。すなわちスタークのいう「オーディエンス・カルト」と「クライアント・カルト」が形成されるにとどまった。

天理教が新宗教へ展開したといえるのは、伝統宗教と対立するたびに、行政機関による制裁を受けながらも、一般的な救済が実現する根拠を特定していったからである。中山みきは信徒たちに、神名を唱える儀礼を近村の由緒ある神社で実施させたり、神職と問答させた結果、代官所や県庁による指導や禁止、警察による取締を受けるようになった。そのたびにみきは、中山家の屋敷における主宰神による人間の創造にまで遡る救済の根拠を儀礼の様式や文字に表わしていった。

天理教の新宗教への展開は、「宗教革新」の第2の局面と捉えられる。救済の根拠が特定されると、一般的な救済も体系的に説かれるからである。中山みきは、神による人間創造の神話を詳述し始めると、人間の体内の機能と自然界の運行についても体系的に説き始めた。そしてこの局面は、スタークのいう「カルト運動」を伴うといえる。救済の根拠が特定されると、その根拠にもとづいて教団が作られるからである。信徒たちは、近世の信仰共同体としての講を、人間創造の地が中山家の屋敷に特定された明治8(1875)年頃から、各居住地域に結成し始めた。

天理教の講が組織化され始めたのは、警察による取締を回避するために、教祖の側近たちが公認を模索し始めてからであった。明治13(1880)年に教祖みきの長男秀司が伝統宗教に所属する講社を結社したところ、それまで各地域に結成されてきた講は、その講社の下位に「組」として編入された。しかしみきは、側近たちによる公認の模索に最期まで反対し続けた。側近たちは伝統宗教に所属するために偽装し、儀礼の遂行を抑制したからである。したがって教祖の存命中は、教団が組織化されても、公認されるには至らなかった。この意味で、側近たちによる公認の模索はもはや「宗教革新」の過程にない。

## 宗教集団の展開モデル

三木 英（大阪国際大学）

近年の宗教社会学研究において、フィールドに出たの調査研究の成果蓄積には目覚ましいものがあるだろう。対して、理論研究のそれは低調であるように思われる。具体的な経験的事実に迫る研究と理論の研究はあい携えて進められるべきであるが、現状は非対称といえそうである。本報告は宗教社会学理論（宗教集団論・運動論）の発展に裨差することを志向するものであるが、それが延いてはフィールドでの調査の導きとして資することを望むものである。

研究の方法の基本として、「比較」があるだろう。そして比較のためには、対象を共通の枠組みのなかに位置づけなければならない。本報告はその枠組みとして宗教集団類型（論）に照準を合わせ、議論を展開してゆく。

宗教集団類型については M.ヴェーバーや E.トレルチ、R.ニーバーによるチャーチ・セクト・デノミネーションがよく知られているだろう。さらに R.スターク & W.S.ベインブリッジによるカルト（カルト運動—クライエント・カルト—オーディエンス・カルト）もまた、私化された時代の宗教集団を把握するに極めて魅力的な概念である。しかし前者の連続体がキリスト教的なニュアンスの濃厚な諸類型であって、日本のような宗教風土に登場する集団を把握するに適格でないことは夙に指摘されてきたところである。カルトに関しては、カリスマ的指導者を中心に形成される組織的成熟度の低い小規模集団であり、something new として自己規定しているというその定義が、日本新宗教に適合的と思われる。とはいえ、昨今の「カルト」に対するネガティブ・イメージを考慮するならば、この類型を学問用語として使用することに躊躇せざるをえない。

そこで本報告は、それらに替わる、かつそれらとも親和する新たな諸類型を呈示することにする。集団成員が自らの宗教生活を営むにあたり権威的存在による指導に身を委ねるか、それとも自律性を重んじるのか（権威志向—自律志向）、また（宗教情報発信者を含む）指導層が成員を強く統制するような組織の形成を志向するか、成員のゆるやかな結合で事足りりとするか（組織運営—ネットワーク形成）を類型化の基軸として成立する、①権威指向型組織②権威志向型ネットワーク③自律志向型組織④自律志向型ネットワークの四類型がそれである。これらに依るならば、チャーチやデノミネーション（制度的教団宗教、組織宗教）、カルト運動（新新宗教）は権威志向型組織として、民俗宗教（シャーマン—クライエント・ネットワーク）は権威志向型ネットワーク、セクトやクライエント・カルト（スピリチュアル・セミナー）は自律志向型組織、オーディエンス・カルト（スピリチュアル情報消費者群）は自律志向型ネットワークと理解できるだろう。なお、集団がその存立根拠を創唱された教義に求めるか旧来からの伝統に求めるかによって、チャーチ・デノミネーションとカルト運動（新新宗教）とを、セクトとクライエント・カルト（スピリチュアル・セミナー）を、識別することが可能となる。

この上で、宗教集団の展開モデルを示すことが本報告の課題である。理念型的には、(1)権威志向型ネットワーク→権威志向型組織(2)権威志向型ネットワーク→自律志向型ネットワーク(3)権威志向型ネットワーク→自律志向型組織(4)権威志向型組織→権威志向型ネットワーク(5)権威志向型組織→自律志向型ネットワーク(6)権威志向型組織→自律志向型組織(7)自律志向型ネットワーク→権威志向型ネットワーク(8)自律志向型ネットワーク→権威志向型組織(9)自律志向型ネットワーク→自律志向型組織(10)自律志向型組織→権威志向型ネットワーク(11)自律志向型組織→自律志向型ネットワーク(12)自律志向型組織→権威志向型組織の、12の展開パターンが取り出せるはずである。そしてそれらの展開がいかなる社会的ファクターによって促されるのかを考察してゆく。

## 発表要旨（テーマ・セッション）

テーマ・セッション 第一会場（A321） 7日（日）9：30～12：30

### ◆ 今日の SGI-USA — “World Propagation” から “World Peace” へ—

司 会：対馬路人（関西学院大学）

発表者：川端 亮（大阪大学）

「アメリカ SGI の歴史と現在—組織と制度から—

稲場圭信（神戸大学）

「アメリカ人信者の回心過程

—ロフランド＝スタークモデルを中心に—」

秋庭 裕（大阪府立大学）

「日蓮の 21 世紀—その受容の可能性—」

コメンテーター：中野 毅（創価大学）

中牧弘允（国立民族学博物館）

#### <趣旨>

このテーマ・セッションでは、日本最大の新宗教教団である創価学会の海外組織 SGI (Soka Gakkai International) のアメリカ合衆国での布教の歴史、信者の入信過程、教えの受容などを中心に、多民族から構成されるキリスト教社会であるアメリカ合衆国において SGI がいかに受け容れられたのかについて報告し、コメンテーターやフロアからの意見をもとに議論したい。

海外で布教している日本の宗教の信者の多くは、日本人・日系人であるが、SGI は、192 カ国・地域に 1,200 万人以上の会員がおり、海外に居住する日本人だけではなく、現地の人も信仰されている。SGI は、アメリカ合衆国では 10 万人を超える会員がおり、その多くがアメリカ人である。日本仏教をベースとし、集団主義的ともいわれる創価学会が、言語も異なる、自由主義的・個人主義的な、ユダヤ＝キリスト教文化圏であるアメリカ合衆国において、いかに受け容れられたのだろうか。

1970 年代までの SGI-USA については、井上順孝『海を渡った日本宗教』（1985 年）に詳しく取り上げられているほか、ブラジル SGI については、渡辺雅子『ブラジル日系新宗教の展開』（2001 年）でとりあげている。しかし、SGI については、日本人による研究よりも、英語の研究書、論文の方がはるかに多い。この 10 年でもウィルソン、ドベラーレ、ハモンド、クラークなどが研究を行っている。このように海外の宗教研究者にとっても SGI は非常に興味深い研究対象なのである。

本テーマ・セッションは、発表者 3 人による 4 年間のアメリカ SGI の調査研究に基づき、英語使用という言語の問題、リーダーシップや組織構成の問題、回心過程の理論、個人主義や集団主義、現世主義、物質主義と脱物質主義、エスニシティ、多文化共生などの概念や切り口から、SGI-USA について報告し、宗教社会学の可能性をさらに拓く研究を目指したい。

◆ 教育資源としての＜宗教文化＞—宗教文化教育はどんな学問領域に関わるか？—

企画者・司会：井上順孝（国学院大学）

発表者：野原佳代子（東京工業大学） 「言語学、翻訳理論の立場から」

平藤喜久子（国学院大学） 「神話学の立場から」

牧野淳司（明治大学） 「中世文学の立場から」

山田岳晴（国学院大学） 「建築学の立場から」

コメンテーター：岩井 洋（帝塚山大学）

＜趣旨＞

大学における宗教文化教育を、宗教学関連の学問分野のみならず、より広い学問分野との関係から見直すことで、その広まりと深まりを目指すセッションである。

2007年度に本学会には「宗教文化士（仮称）」という資格の設置について論じるためのワーキンググループが設けられた。2008年度にはこのワーキンググループのメンバーと、日本宗教学会に設けられた同様の目的のための検討委員会のメンバーが合同して、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者・星野英紀）を申請して採択され、3年間にわたる研究が可能となった。

2009年度はその2年目にあたるが、初年度の研究成果を踏まえ、さらに具体的な問題把握に努める段階になっている。その一環として、本パネルでは、大学における宗教文化教育を幅広い学問領域から考えていくことにする。宗教文化教育は、宗教社会学、宗教民族学、宗教民俗学、比較宗教学といった直接関わる学問分野のみならず、法、音楽、美術、芸術、文学、建築など、多くの学問分野に関わるテーマである。「宗教文化」というのは、高等教育においても多様な学問領域からの対象たりうると考える。その意味で、これは教育にとっての一つの資源であるという見方が成り立つ。当然ながら、さまざまな学問領域による横断的な議論を積み重ねることが必要となってくる。

しかしながら、それぞれの分野における研究、教育の問題を、こうした観点から横断的に議論する機会は乏しいのが現状である。そこで今回のパネルでは、発題者として本学会の会員ではない研究者も招き、各学問分野の教育の現場において宗教教育に関連するテーマがどう扱われているのかについて紹介してもらう。その上で、宗教文化教育を推進していくためには、どのような情報交換のシステムが必要になるかを議論する。また宗教文化を教育資源としてみなした場合、対象の理解のために、具体的にどのような教材、テキスト、さらにはデジタルコンテンツといったものを作成していかなければならないかといった課題についても、自由な発想に基づいて意見を交換する予定である。

2008年度に実施した学生に対する宗教文化教育のニーズ調査においても、学生たちは大学や学部の違いに関わらず、一定の関心をもっていることが明らかになった。どのような内容の講義に関心が深いこともある程度傾向をみてとることができた。こうした点も踏まえ、現代日本において可能な宗教文化教育のあり方を考えていきたい。



◆ 書評セッション：カルト／スピリチュアリティ／現代宗教の把握  
―藤田庄市著『宗教事件の内側』、櫻井義秀編『カルトとスピリチュアリティ』  
を題材に―

企画者：葛西賢太（宗教情報センター）

司 会：弓山達也（大正大学）

コメンテーター：吉永進一（舞鶴工業高等専門学校）

岩田文昭（大阪教育大学）

塚田穂高（東京大学大学院）

編著者からのリプライ：藤田庄市（フォトジャーナリスト）

櫻井義秀（北海道大学）

<趣旨>

藤田庄市著『宗教事件の内側——精神を呪縛される人びと』岩波書店、2008年、および、櫻井義秀編『カルトとスピリチュアリティ——現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房、2009年の二著に導かれ、現代宗教をいかに捉えるかを議論したい。

両著は、「カルト」が社会問題となる現象や「スピリチュアリティ」ブームの分析を通して、現代社会の構造的変化や現代人の意識変容を捉えようとする。また「カルト」は反社会的な集団であるから本物の宗教ではない、あるいは信教の自由の観点から「カルト」の宗教性に配慮すべき、などのいずれの立場にも与せず、「カルト」は宗教と別物でも不可侵の信仰世界でもなく、人々を呪縛する隠微で「宗教的な」力が行使される場として吟味することで、宗教を見る側の研究者の視点、感性、立場性をも問い直そうとする。

藤田は、近年の一連の「奇怪な」宗教事件およびその裁判を丹念に追う。「奇怪な」行為を自ら望んだかのようにさせる背景に、宗教体験への渴望や宗教的恫喝を指摘する。「信教の自由」を無条件に認める古い法解釈や、宗教性を切り離れた詐欺としての告発だけではこれらに踏み込めないことを示し、宗教と世俗とを二元的に分ける見方の問題性を示す。

櫻井編では、現代社会における宗教の位置と「カルト」問題化の状況、「カルト」と「スピリチュアリティ」との影響関係、「カルト」問題と引きこもり問題、入信・回心・脱会の各過程における当事者の主体性や外部からの介入の是非等が論じられる。多様な問題と多様な立場からの諸研究を対比することで、「カルト」をめぐる議論の錯綜をほぐそうとする。

両著に共通するのは、「スピリチュアリティ」ブームと包括的に呼ばれる諸信念の広がりがある、それは私たちの常識や価値観にも深く根を張り、「カルト」問題の構成にも関わっている、ただしこれらを捉える視点には反省が必要、という理解である。両著はまた、宗教研究者の視点や宗教にたいする感性、宗教（学）教育に関わるもの（教育者や宗教者を含む）の立場や方法論を吟味しない議論がどのような陥穽にはまるかを示している。

セッションでは、両著の主張や前提を素材に、「カルト」や「スピリチュアリティ」現象を捉える方法論、研究者の視点や宗教にたいする感じ方、当事者性への評価等々に関わる問題を広く議論したい。多くの分野からの参加をお待ちする。

◆「民衆宗教」研究の新展開 (2) —「民衆宗教」とフェミニズムの対話—

企画・司会：熊田一雄（愛知学院大学）

発表者：信田さよ子（原宿カウンセリングセンター）「日本の精神科医療の男性中心主義」

熊田一雄（愛知学院大学）

「天理教教祖は強い父の夢を見たか？」

—宗教界と宗教学の共犯関係—

渡辺順一（金光教羽曳野教会）

「救いの場のジェンダーとセクシュアリティ

—非対称的な親密性の発生をめぐって—

菱木政晴（同朋大学）

『いのち』教とフェミニズム」

コメンテーター：島 蘭 進（東京大学）

総合討論（フロアを交えて）

<趣旨>

このテーマ・セッションでは、前回に引き続いて、学会研究プロジェクト・「民衆宗教」研究会の研究経過報告を行う。前回は「階級」を主題にしたが、今回は「ジェンダー」を主題とする。

「宗教とジェンダー」については、これまでもこの学会で何度も優れたセッションが開催されたが、1. 分析の焦点が歴史宗教の教義上の性差別問題に偏っており、民衆の生活現場の生々しい苦難と救いの分析が立ち遅れ気味であること、2. 女性フェミニスト研究者による宗教教団の性差別批判が先行し、宗教に関わる男性たちがフェミニストの問題提起にどう答えるか、という問題がまだ本格的に扱われていない、というきらいがある。このセッションでは、民衆の生活分析の生々しい苦難から出発し、男性宗教者・宗教学者がフェミニストの問題提起にどう答えるべきか、を討論する。そのために、報告者とコメンテーターは、意図的に男性を中心とした。

信田さよ子は、フェミニスト・カウンセラーとして、民衆の生々しい苦難の現場から日々浮かびあがってくる日本の精神科医療の男性中心主義を批判し、他のパネリストに対する問題提起を行う。熊田報告は、島蘭進の天理教教祖論を素材として、日本の宗教界と宗教学が、男性中心主義という点で共犯関係を結んでいることを批判する。渡辺報告は、フェミニストによる教団批判を踏まえた上で、教団としてジェンダー問題にどう答えるべきかを論じる。菱木報告は、近年「いのち」教として民衆宗教的性格を深めている浄土真宗大谷派が、フェミニストの問題提起にどう答えるべきかを論じる。コメンテーターの島蘭は、大局的見地から論点の整理を行う。

もとより、各報告のテーマはとても大きく、なおかつ日本の宗教界にとってデリケートな、できれば触れずに避けて通りたい(?)テーマである。各報告者は、話題を提供するに過ぎない。このセッションが、フロアを巻き込んだ活発な全体討議のたたき台になれば幸いである。

## ホテル・託児所のご案内

### 【 八王子駅徒歩圏内 ホテル一覧 】

#### J R 八王子駅周辺

| ホテル名                         | 住所        | 電話           | 1泊料金（1名） |
|------------------------------|-----------|--------------|----------|
| 1 京王プラザホテル八王子                | 旭町 14-1   | 042-656-3111 | 8,900 円～ |
| 2 千代田ホテル                     | 旭町 4-1    | 042-624-3281 | 5,500 円～ |
| 3 マロウドイン八王子                  | 三崎町 6-11  | 042-623-7111 | 6,900 円～ |
| 4 八王子アーバンホテル                 | 子安町 1-1-8 |              | 4,900 円～ |
| 5 サンホテル八王子                   | 子安町 3-5-7 | 042-644-4141 | 5,000 円～ |
| 6 三恵シティホテル八王子                | 寺町 60-1   | 042-622-3388 | 5,565 円～ |
| 7 シーズイン八王子                   | 寺町 43-2   |              | 5,600 円～ |
| 8 八王子温泉「やすらぎの湯」 & ホテル・グランSPA | 中町 2-1    | 042-648-5111 |          |

#### 京王八王子駅周辺

| ホテル名            | 住所         | 電話           | 1泊料金（1名） |
|-----------------|------------|--------------|----------|
| 9 八王子アーバンホテル    | 子安町 1-1-8  | 042-660-7111 | 5,100 円～ |
| 10 R & B ホテル八王子 | 明神町 2-26-9 | 042-631-1515 | 6,510 円～ |
| 11 京王八王子駅前ホテル   | 明神町 2-25-4 | 0426-42-9111 | 4,500 円～ |
| 12 八王子プラザホテル    | 明神町 4-6-12 | 0426-46-0111 | 5,000 円～ |

### 【 託児所 】

創価大学周辺には託児施設はありませんので駅周辺が便利です。  
以下が駅に近く、一時預かりに対応して下さるとのことです。

「ドレミファ保育ルーム」

「ピーカブー」

詳しくは「託児所ナビ」をご覧ください。

<http://www.takunavi.tv/takujisho/tokyo/hachioji.html>

## 創価大学 交通アクセス

【所在地】 〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236

【アクセス】 ※駐車場の関係上、お車でのお越しはご遠慮ください。

### ○ 最寄り駅 JR 八王子駅、または京王線（私鉄）京王八王子駅

・JR 八王子駅：JR 東京駅から JR 中央線で約 1 時間、新宿駅から約 45 分

東海道新幹線の新横浜駅から、JR 横浜線で約 45 分

・京王八王子駅：新宿から京王線で約 40 分

### ○ 駅→大学（西東京バス）料金 300 円

・京王八王子駅始発→JR 八王子駅経由→創価大学（正門・東京富士美術館前下車が便利）

・JR 八王子駅始発→（直通、または各駅）→創価大学（同上）

※いずれも「ひよどり山トンネル経由」が早いです

直通の場合 約 15 分、各駅で「ひよどり山トンネル経由」は約 20 分

他の各駅停車は約 30 分

|         |                                       |
|---------|---------------------------------------|
| 京王八王子   | 4 番のりば                                |
| JR 八王子  | 12 番のりば（※土曜日のみ、10:27 発迄は、14 番のりばから発車） |
| ひ 02    | ひよどり山トンネル経由 創価大正門行                    |
| 16 号 06 | 八日町経由創価大循環                            |
| ひ 04    | ひよどり山トンネル経由創価大循環                      |

「創価大正門・東京富士美術館」「富士美術館」から A 棟・・・徒歩 約 10～15 分

### ○大学→駅（西東京バス）

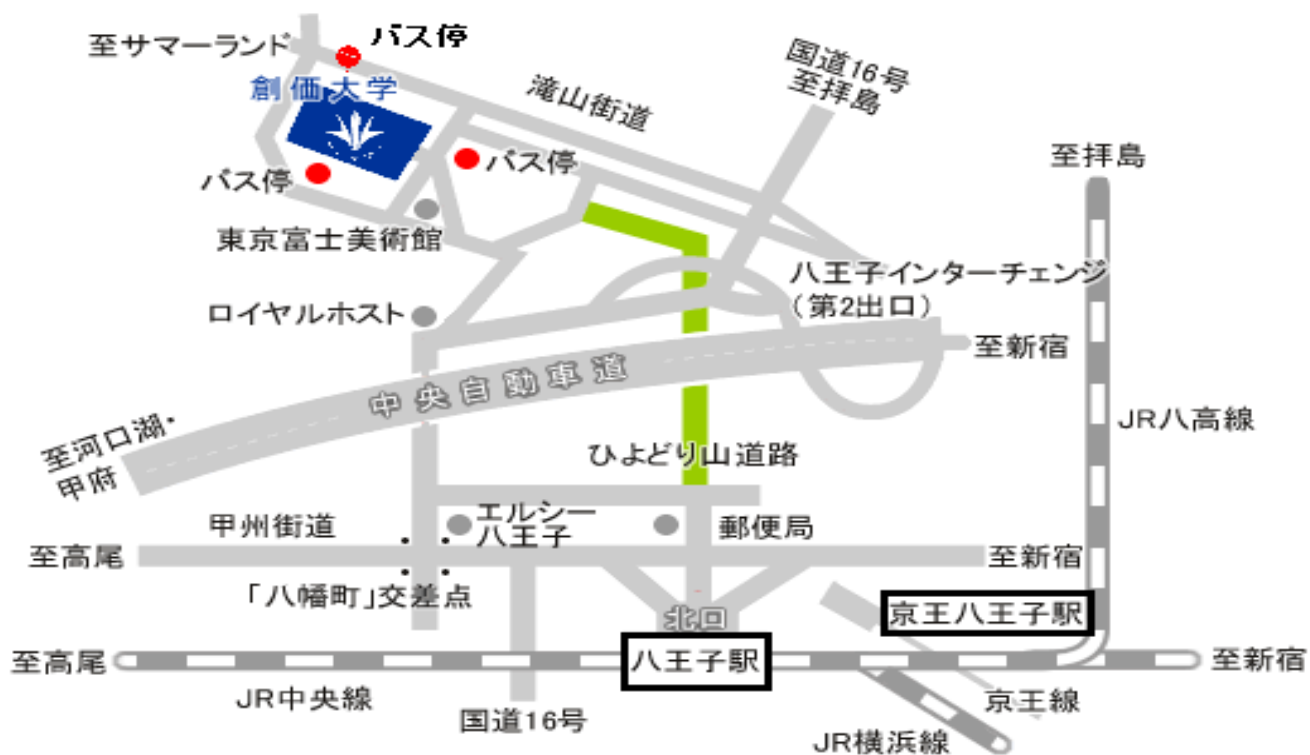
|                                           |                         |
|-------------------------------------------|-------------------------|
| 「創価大正門、東京富士美術館」のぼり（屋根つきのバス停）              |                         |
| ひ 02                                      | ひよどり山トンネル経由 JR・京王八王子駅行き |
| 16 号 01、05                                | 八日町経由 JR・京王八王子駅行き       |
| 16 号 01、05                                | 「直通」JR 八王子駅 行き          |
| 「創価大正門、東京富士美術館」くんだり（大学側）、「創価大創大門」「創価大栄光門」 |                         |
| 16 号 06                                   | 八日町経由創価大循環              |
| ひ 04                                      | ひよどり山トンネル経由創価大循環        |

### ○大学⇄駅（タクシー）ひよどり山トンネル経由約 10 分、約 1,500～1,800 円

・駅前タクシー乗り場：各駅前

・大学付近タクシー乗り場：東京富士美術館前

## キャンパスマップ



※ 駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

※ ひよどり山トンネル経由が便利です。下車は正門下車が分かりやすくお勧めです。

## バス路線図



## バス時刻表

|          |                                        |
|----------|----------------------------------------|
| 出発バス停名   | 八王子駅北口                                 |
| 系統番号・行き先 | ひ 02 京王八王子駅～ひよどり山トンネル～創価大学正門・東京富士美術館行き |

| 時                                                                     | 平日                         | 土曜              | 日曜・祝日          |
|-----------------------------------------------------------------------|----------------------------|-----------------|----------------|
| 7                                                                     | 25                         |                 |                |
| 8                                                                     | 0 16直 23直 28 34直 38直<br>50 | 3 20 35 55      | 3 20 35 55     |
| 9                                                                     | 9 25直 33 38直 52            | 2直 15 30直 35 55 | 15 35 55       |
| 10                                                                    | 3直 9 17直 25 35美 55美        | 13 33美 53美      | 13 33美 53美     |
| 11                                                                    | 9美 22美 39美 52美             | 13美 33美 53美     | 13美 33美 53美    |
| 12                                                                    | 9美 22美 39美 52美             | 13美 33美 53美     | 13美 33美 53美    |
| 13                                                                    | 9美 22美 39美 52美             | 13美 33美 53美     | 13美 33美 53美    |
| 14                                                                    | 9美 22美 39美 52美             | 13美 33美 53美     | 13美 33美 53美    |
| 15                                                                    | 9美 22美 39美 52美             | 13美 33美 53美     | 13美 33美 53美    |
| 16                                                                    | 9美 22美 39 52美              | 3美 20美 35美 55美  | 3美 20美 35美 55美 |
| 17                                                                    | 2美 20美 32美 39 55美          | 20美 35美 55美     | 20美 35美 55美    |
| 18                                                                    | 2美 22美 35 55美              | 20美 35美 55美     | 20美 35美 55美    |
| 19                                                                    | 22美 35 55美                 | 20美 35美 55美     | 20美 35美 55美    |
| 20                                                                    | 22美 35 55美                 | 20美 55美         | 20美 55美        |
| 21                                                                    |                            |                 |                |
| 青色( )-[ 創価大学循環 ],赤色(直)-[ 直通創価大正門行き 途中バス停は停車致しません ],黒色(美)-[ 富士美術館止まり ] |                            |                 |                |

2009 年 04 月 01 日改正

|          |                                        |
|----------|----------------------------------------|
| 出発バス停名   | 京王八王子駅                                 |
| 系統番号・行き先 | ひ 02 京王八王子駅～ひよどり山トンネル～創価大学正門・東京富士美術館行き |

| 時                                   | 平日                 | 土曜             | 日曜・祝日          |
|-------------------------------------|--------------------|----------------|----------------|
| 7                                   | 23☆ 58☆            |                |                |
| 8                                   | 26☆ 48☆            | 1☆ 18☆ 33☆ 53☆ | 1☆ 18☆ 33☆ 53☆ |
| 9                                   | 7☆ 31☆ 50☆         | 13☆ 33☆ 53☆    | 13☆ 33☆ 53☆    |
| 10                                  | 7☆ 23☆ 33美 53美     | 11☆ 31美 51美    | 11☆ 31美 51美    |
| 11                                  | 7美 20美 37美 50美     | 11美 31美 51美    | 11美 31美 51美    |
| 12                                  | 7美 20美 37美 50美     | 11美 31美 51美    | 11美 31美 51美    |
| 13                                  | 7美 20美 37美 50美     | 11美 31美 51美    | 11美 31美 51美    |
| 14                                  | 7美 20美 37美 50美     | 11美 31美 51美    | 11美 31美 51美    |
| 15                                  | 7美 20美 37美 50美     | 11美 31美 51美    | 11美 31美 51美    |
| 16                                  | 7美 20美 37☆ 50美     | 1美 18美 33美 53美 | 1美 18美 33美 53美 |
| 17                                  | 0美 18美 30美 37☆ 53美 | 18美 33美 53美    | 18美 33美 53美    |
| 18                                  | 0美 20美 33☆ 53美     | 18美 33美 53美    | 18美 33美 53美    |
| 19                                  | 20美 33☆ 53美        | 18美 33美 53美    | 18美 33美 53美    |
| 20                                  | 20美 33☆ 53美        | 18美 53美        | 18美 53美        |
| 21                                  |                    |                |                |
| 青色(☆)-[ 創価大学循環 ],黒色(美)-[ 富士美術館止まり ] |                    |                |                |

2009 年 04 月 01 日改正

|          |
|----------|
| 出発バス停名   |
| 系統番号・行き先 |

創価大正門東京富士美

ひ 02 創価大学正門・東京富士美術館～ひよどり山トンネル～八王子駅行き

| 時  | 平日                                      | 土曜                           | 日曜・祝日                        |
|----|-----------------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 8  | 0 ㊦ 5 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦ 50 ㊦             | 0 ㊦ 10 ㊦ 15 ㊦ 20 ㊦ 30 ㊦      |                              |
| 9  | 7 ㊦ 47 ㊦ 55 ㊦                           |                              |                              |
| 10 | 37 ㊦                                    | 40 ㊦                         | 40 ㊦                         |
| 11 | 0 ㊦ 20 ㊦ 32 ㊦ 47 ㊦                      | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 12 | 2 ㊦ 17 ㊦ 32 ㊦ 47 ㊦                      | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 13 | 2 ㊦ 17 ㊦ 32 ㊦ 47 ㊦                      | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 14 | 2 ㊦ 17 ㊦ 32 ㊦ 47 ㊦                      | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 15 | 2 ㊦ 17 ㊦ 32 ㊦ 47 ㊦                      | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 16 | 2 ㊦ 10 ㊦ 17 ㊦ 33 ㊦ 40 ㊦ 47 ㊦            | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 17 | 10 ㊦ 15 ㊦ 17 ㊦ 27 ㊦ 40 ㊦ 47 ㊦ 50 ㊦      | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 18 | 0 ㊦ 10 ㊦ 15 ㊦ 22 ㊦ 30 ㊦ 40 ㊦ 47 ㊦       | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 19 | 10 ㊦ 22 ㊦ 40 ㊦ 47 ㊦                     | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 40 ㊦           |
| 20 | 10 ㊦ 22 ㊦ 30 ㊦ 40 ㊦ 45 ㊦ 47 ㊦ 50 ㊦ 55 ㊦ | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 30 ㊦ 40 ㊦ 50 ㊦ | 0 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 30 ㊦ 40 ㊦ 50 ㊦ |
| 21 | 5 ㊦ 10 ㊦ 28 ㊦ 50                        | 5 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 34             | 5 ㊦ 10 ㊦ 20 ㊦ 34             |
| 22 | 23 ㊦ 45                                 | 3 ㊦ 31                       | 3 ㊦ 31                       |
| 23 | 0 ㊦ 17 ㊦ 45 ㊦                           | 0 ㊦ 20                       | 0 ㊦ 20                       |
| 0  | 2 ㊦ 28 ㊦                                |                              |                              |

黒色(㊦)―[ ひよどり山トンネル経由 ], 黒色(㊦)―[ 稲荷坂下・八日町経由 ], 赤色(●)―[ 直通 八王子駅北口まで途中バス停は停車致しません ], 赤色(\*)―[ 深夜バス(運賃倍額) ]

2009 年 04 月 01 日改正



メモ

## 「宗教と社会」学会第17回学術大会プログラム・要旨集

### 製 作

「宗教と社会」学会第17回学術大会事務局  
〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236 創価大学A棟 8 階 中野毅研究室  
e-mail : jasrs2009@gmail.com  
tel/fax : 042-691-4545  
大会ホームページ <http://jasrs.seesaa.net/>

### 編 集

中野毅（創価大学文学部教授）  
林 亮（創価大学文学部教授）  
発行日 2009年4月28日（800部印刷）  
印刷所 清水工房（TEL 042-620-2626）